

『互いの友』論

光 永 裕 美

I 虚 と 実

Dickens の完結した最後の長編小説である『互いの友』に一組の極めて興味をそそる夫婦が登場する。それは互いに財産があると誤解してその金目当てに結婚し早くも新婚旅行でお互いに真相を発見し、以後財産がある振りをして社交界に食い込み取り入って金稼ぎに邁進しようと誓い合い「希望に満ちた結婚生活」を送ろうとしている「幸せな二人」Lammle 夫妻である。以降二人は Lammle 夫人の自尊心のように any lingering reality or pretence (p. 127)⁽¹⁾の中を歩きつ戻りつする。そもそも二人の結婚式さえ Eugene Wrayburn の眼を通すとまるで葬式のようなであった。この夫婦の感情の交換が行われるのは「鏡」の中であり、会話は直接には交わされず、二人の間にいると思われる some invisible presence (p. 556) を通してなされる。この「虚」の上に成り立った夫婦の意志疎通は「虚」の媒体を通してなされるのである。

Lammle 夫妻に見られるように『互いの友』の登場人物は様々な形で reality と pretence, 「実」と「虚」とに関わりを持つ。主人公の John Harmon は父の遺産を継ぐべく帰国の途中正体を隠す為に三等航海士と入れ替わり、その航海士の死亡により自分が死んだものと思われているのを幸い、Julius Handford, John Rokesmith と名を変えて自分が戻るべき筈の人々の所へ姿を現わす。全く「虚」の人物と化すのである。彼の遺言上の許嫁である Bella Wilfer は貧しく育ったが故にそして又 Boffin の養女となる事で突然富を手に入れたが故にその金銭に対する執着はすさまじいものがあったが、金の持つ力のおぞましさを知った時、果して金は善なのか悪なのかと一人「鏡」に問いかける。

『互いの友』論

富の「虚」と「実」に気が付き始めたと言える。そして財産も地位もない「虚」の Harmon, Rokesmith を愛し結婚するが、彼女は John の人間性という「実」を見抜いたと言える。Rokesmith を雇った Boffin 夫妻は早い時期に彼を Harmon と見破ったにもかかわらずそれを隠し「虚」の John と応接する。Boffin は Bella が彼の養女となる事で新しく手に入れた富に驕り高ぶり Rokesmith に冷たく当たっていた時には守銭奴になった「振り」をして Bella への警鐘とする。しかしその守銭奴振りとして果して「振り」であったのか、Boffin 自身 John Harmon の「死亡」により手に入れた雇い主であった John の父の財産により墮落し始めていたのか reality と pretence の境を決めかねる所である。Boffin は John の父の遺産つまり塵芥の山とそれによる富を受け継いだ事で人々から Golden Dustman と呼ばれるようになる。この全く正反対のものである dust と gold の結びつき程、「虚」と「実」の関係を象徴的に表わしているものはない。dust から gold を得るとは「虚」から「実」を生み出す事であるが、その gold も手にした人間の使い様ではまた別の「虚」を生み出す事にもなる。

Boffin は実は文盲なのであるが、彼の読書係として雇われるのが「義足の文学者」Silas Wegg である。二人は *The Decline and Fall of Roman Empire* という本を読む事になるのだが、Boffin 邸へ向う Wegg を Dickens は「ローマ帝国へゆっくりと歩を運ぶ」と形容し、Wegg は 'And now, Mr. Boffin, sir, we'll decline and we'll fall!' (p. 186) と呼び掛ける。これは Dickens の見事な笑いのテクニックの一例であり、実際の行動に架空の世界を、ありふれた行為に巨大な言葉を被せた奇想天外さ、可笑しさがある。「実」の世界を「虚」の世界に置きかえその落差の大きさ、中身の虚ろさから笑いを引き出すのである。それと同時に、Boffin 帝国を崩壊させようとするやがて芽生える Wegg の企みや、「振り」であれ何であれ Boffin のこれからの金による墮落を暗示している。笑いと言線を兼ねるあたり Dickens の腕の冴えが窺える。

「虚」と「実」の関わり方として位置の逆転が考えられる。Jenny Wren とその父の関係はその顕著な例である。Jenny は年の頃は十二・三、不具者ではあるが人形の衣装作りで自活している。その父はのんだくれで生活能力はなく Jenny に養われている仕末である。親と子の関係が逆転しているのだがそれを

『互いの友』論

裏付けるように彼女は父を my child と呼ぶ。あるべき関係が引っ繰り返り「虚」の関係が生活を支えている。その Jenny と老いたユダヤ人 Riah は Cinderella と fairy godmother という架空の関係に自分達を準えている。一時期 Riah の雇い主である Fledgeby の策略により Riah 自身が強欲な金貸であると Jenny が誤解していた時は彼は the wicked Wolf と呼ばれるが。Cinderella と godmother という関係は架空ではあるが、Jenny とその良き相談相手である Riah の関係の真実を表わしている。Jenny は実生活での欠除を Riah との関係で補っている。「実」に於て「虚」が支配しているのに対し、「虚」の関係に準えられた「実」がその空隙を埋めていると言える。christian gentleman である Fledgeby が自分の正体を隠すためユダヤ人である Riah こそが強欲な金貸その人であると身代りを強要するのも位置の逆転の一つの例である。「虚」が「実」に取って換わるのである。Jenny でさえ一時はその「虚」に惑わされるがやがて真相を探り出す。彼女の作った人形の名が Mrs. Truth であるのは暗示的である。

John Harmon と Bella Wilfer を巡る話と平行して、Lizzie Hexam に対する Wrayburn と Headstone の恋の物語が進行する。Lizzie は絶えず火を見つけている。the hollow down by the flare (p. 29 etc.) に見入りそこに fancies を育てている。その fancies とはテムズ河に浮ぶ溺死体から金銭を盗るという父の忌わしい生業から弟を逃がし世に出してやるという事である。虚ろな炎の中はつらい現実からの逃げ場であった。現実から逃れるべく火に見入るのは Lizzie だけではない。狂気のような愛で Lizzie を追い求めた Headstone も、罪と Riderhood に追い詰められた時じっと炎を見つめる。すると現実から一気に逃れたいという彼の願望が成就したかのように、その皮膚は灰を被ったように白くなり衰えみるみる老いて生きながらにして朽ちて行く。さて弟を河から逃がし父は河で死亡した Lizzie を待ち受けていたのは弁護士 Wrayburn と弟の教師 Headstone に思われるという運命であった。彼女は Wrayburn を密かに愛し、Headstone を恐れ嫌う。しかし下層階級の自分と中流の Wrayburn との間に愛が成立すべくもないと悟り、又恋敵の命を狙う Headstone を恐れて二人の前から姿を消す。ある意味で現実から逃げるのである。しかし Wray-

『互いの友』論

burn が Headstone に襲われ河へ転落した事により Lizzie は現実へ引き戻される。しかも溺死しかけた Wrayburn を救ったのは父の仕事を助けるべく仕込まれた舟を操る術であった。やがて彼女は Wrayburn と結婚する事になるが彼女は「実」から逃げようとして逃げ切れず、「実」で得た術を使い、つまり「実」に立脚する事で「虚」となる筈の Wrayburn との関係を「実」に変えたのである。やはり彼女も又「虚」「実」の狭間を彷徨う人であった。

Lizzie に河から救われる Wrayburn はいかなる人間であろうか。彼は職業も許嫁も父に定められ倦怠と無関心を装う内にそれが彼の第二の性格となり energy という言葉を嫌悪する虚ろな存在である。Lizzie は彼は the want of something to trust in, and care for, and think well of (p. 349) の為に「見捨てられた人」のようになっているのだと Wren に語るが、Wrayburn 自身もエネルギーを発揮するに値いするものが与えられれば発揮すると同僚の弁護士 Lightwood に語った事がある。その Wrayburn が Lizzie と出会い彼女の教育にいささかエネルギーを注ぐのだが「どうするつもりなのか、結婚するつもりなのか」という Lightwood の問には ‘I don’t design anything. I have no design whatever. I am incapable of designs. If I conceived a design, I should speedily abandon it, exhausted by the operation.’ (p. 294) と意志の無さを露呈する。Lizzie に対する自分の本当の気持ちにも又彼女の自分に寄せる愛情にも気付かず、Lizzie の教育者という「虚」の役割に満足している。彼が二人の間の「実」に目覚めるためには何が必要なのであろうか。それは第三章「生と死」に於て見て行きたい。

さて、もう一人の求婚者 Headstone は妄執ともいえる愛を Lizzie に寄せて恐れられる。彼は愛の「虚」像を追っている。恋敵 Wrayburn 殺害に当ってはならず者 Riderhood の身形を真似る事で彼に罪を被せようとするがその企みを見破られ彼に脅迫される事になる。「虚」と化して罪を逃れようとし結局その「虚」に追い詰められるのである。

以上のようにこの小説では doubleness という技巧が様々な形で使われているのだが、筆者はその the principle of doubleness⁽²⁾ を「虚」と「実」と考えたいのである。

『互いの友』論

II 人と物

さて『互いの友』には John Harmon と Bella を巡る人々, Eugene Wrayburn と Lizzie を巡る人々の他に, ある Society を構成する一群の人々が同じような重みを持って登場する。それは新興成金で国会議員にもなる Veneering 家に群がる人々である。Veneering 家は家も家具も友人さえも新しく全てが bran-new (p. 6) である。宴会の客は主人と客を取り違え, 客同士はお互いを識別出来ない。アイデンティティを喪失している。会話に於ける反応も, Boots, Brewer, Buffer という客の名前が暗示しているように相似たものである。曰く,

{ ‘Deeply interested!’
 { ‘Quite excited!’
 { ‘Dramatic!’
 { ‘Man from Nowhere, Perhaps!’ (p. 12)

(この言葉の前にある括弧は Dickens 自身がつけているものである) 別の日, 「今朝は新しい事は何もないね」という言葉に客達はこう答える。

{ ‘No, there’s not a word of news,’ says Lammle.
 { ‘Not a particle,’ adds Boots.
 { ‘Not an atom,’ chimes in Brewer. (p. 410)

僅かでも違いがあると異論を唱える向きには別の宴会の反応がある。

General sensation against the young woman. Brewer shakes his head. Boots shakes his head. Buffer shakes his head.

.....

General sensation repeated. Brewer says, ‘Oh dear!’ Boots says, ‘Oh dear!’ Buffer says, ‘Oh dear!’ (p. 817)

人々は夫々の個性人格を持った個人ではなく集団 Society を構成する物と化している。宴会に必要なテーブル, 椅子, 食器のような an article of furniture (p. 6 etc.) なのである。人間として「実」を失って「虚」となっているので

『互いの友』論

ある。

これは客の一人 Lightwood の事務所に於ても見られる現象である。ある時 Boffin がその事務所に赴き面会を申し込むと、その事務員の Blight は面会予定表と称するものに Mr. Aggs, Mr. Baggs, Mr. Caggs, Mr. Daggs, Mr. Faggs, Mr. Gaggs, Mr. Boffin と書き込む。それは主人に客のないのは自分の恥でもあるとする Blight の信念に基づくものだが、人間が簡単に量産されアルファベット順に並べられるあたり、ここでも非人間化、物化を感じとれる。

J. Hillis Miller が指摘しているように、Veneering 家の召使は gloomy Analytical Chemist のように (like) (p. 10) 食事の接待をしているのだが、その内「ように」ではなく Analytical Chemist と直接呼ばれるようになる⁽³⁾。同様に a rocking horse のようだった客 Podsnap 夫人もやがて a rocking horse そのものと呼ばれる。イメージが実体に「虚」が「実」に取って代るのである。

Veneering 家の夕食会の「役に立つ家具」(p. 10) である Twemlow は額に手をやって物思う仕草をするのが癖であるが、その仕草とは裏腹に ‘I must not think of this. This is enough to soften any man’s brain.’ (p. 7) と考えている。もう一人の客 Podsnap は困った事があると右手を打ち振り、顔を紅潮させて ‘I don’t want to know about it; I don’t choose to discuss it; I don’t admit it!’ (p. 128) と言って世界からその問題を追い払ってしまう。然して a fatal freshness の持主であり、その名も Pod’s nap 莢あるいは繭の中でまどろんでいる。Twemlow も Podsnap もある意味で判断停止の状態なのである。判断停止と言えば、いささか他の客とは趣が異なるがやはり Veneering 家の客である Lightwood と Wrayburn もその部類に入るであろう。明確な意志も目的もなく法職に着き茫洋と日を送っているのは indolent Lightwood とて gloomy Wrayburn と御同様である。この二人に被せられた indolent, gloomy という形容詞は度々繰返して用いられるが、二人はあらゆる事に無感覚 (indolent) で判断停止中であると言える。Wrayburn は Veneering 家の客間の椅子に buried alive (p. 11) していると表現されているが生きながら

『互いの友』論

にして死んでいる彼の虚ろな状態をよく表わしている。

斯くて Veneering 家を巡る人々は Veneer という名が示すように上辺だけで、深み、つまり、個人としての中身、実体を失い物と化している。ちょうど客間の「大鏡」に映る人々の姿が薄っぺらな「虚」像であるように。上辺と深みと言え、A.O.J. Cockshut も指摘しているように、この小説では surface と depth という言葉が繰返し使われている⁽⁴⁾。テムズ河に舟を浮べて死体を深している Hexam 親娘は河の surface というより bottom (死を象徴するのであろうか) と一体化し、溺死寸前で引き上げられた Riderhood は死の depth と surface の間を彷徨う。一方、生の世界でも Veneering 家のまだ塗料の乾ききらぬ家具の surface は新興成金の家そのものを象徴し、Rokesmith という「虚」の人物に成り切っている John Harmon の謎の depth は愛妻 Bella さえ探りあぐねる程深い。そしてその depth の底には「実」が隠れている。以上四つの例を総括してみると、surface は「生」と「虚」、depth は「死」と「実」を象徴するのであろうか。

ところで、論文の冒頭に登場した「虚」の夫婦 Lammle 夫妻は当然この Society の一員になっているのであるが、破産する事で「虚」の仮面を剥がれ姿を消す事になる。しかしその後この Society の主人 Veneering 自身も破産し議員の席も失い Society 自体が消滅する。全てが「虚」に帰るのである。いや初めから「虚」であったものが、別の「虚」に移行しただけである。Bella Wilfer が富によって、Charley Hexam が教育によって成り上りたいと思っていたのはこのような世界だったのである。斯くて、Bella や Boffin の世界と Lizzie や Charley の世界と同じような重みをもってこの Society が描かれている事の意味が見えてくる。

さて、この Society に集う人々が個である事を失い物と化しているように、社会の底辺でも物と化している人物がいる。それはあの「義足の文学者」Wegg である。Wegg was a knotty man, and a close-grained, with a face carved out of very hard material...Sooth to say, he was so wooden a man that he seemed to have taken his wooden leg naturally (p. 45-46) 足だけが木の筈である彼が体も人柄さえも木化しているのである。その彼が Boffin に読書係

『互いの友』論

として雇われ、the Bower に住まわせられ、Boffin が好きな時に彼の所へやって来るという状態に対し、‘I am banished to the Bower, to be found in it like a piece of furniture whenever wanted.’ (p. 299) と悲憤慷慨し復讐を誓うのは黙々と家具と化している Society の人々と皮肉な対照をなしている。木化しつつはあるがまだまだ鈍磨するには底辺の人間の血はしぶといのであろうか、「虚」となるにはしたたかな「実」をたとえ悪であれ持ちあわせているのであろうか。Wegg の悪の一時は片棒を担ぎその後改心する Venus の商売が剝製を事としているのは面白い。剝製とは「実」を無くし「虚」となったものを「実」の如く見せかける業である。

Wegg の雇い主である Boffin は「振り」であれ「実」であれ守銭奴と化した時 Bella から ‘Your money has changed you to marble.’ (p. 599) と批難されるが marble になるとは冷酷な人間になることの比喻であり、非人間化、物化している事である。Boffin は Rokesmith に secretary として雇ってくれと頼まれた時 secretary の意味が分らず ‘a piece of furniture’ と考えていた。これは先の Wegg の怒りの言葉と呼応し単に笑い話としてのみ片付けられない。Boffin の守銭奴振りが「振り」かあるいは「実」であったかという疑問に対しては、上のエピソードにも窺えるように非人間化、物化へ向う芽を持っていたというのが真相ではなかろうか。

Lizzie との愛という「虚」を求めた Headstone も、decent な身形をし一見 a thoroughly decent young man (p. 217) ではあるが、その中身は、「機械的に」取得し必要に応じて「機械的に」取り出される知識の貯蔵庫と化している。まさに彼も物と化している。そして彼は Lizzie と Wrayburn を引き裂くべく Wrayburn 殺害を企てたが、皮肉にもその結果は the means of uniting them, a miserable fool and tool (p. 791) と成ってしまうのである。

斯くて上層も下層も物と化し人間としての「実」を失い「虚」となっているのであるが、それは決して人間界だけではない。

The grating wind sawed rather than blew; and as it sawed, the sawdust whirled about the sawpit. Every street was a sawpit, and there were no top-sawyers; every passenger was an under-sawyer, with

『互いの友』論

the sawdust blinding him and choking him. (p. 144)

風は気体である事をやめ固体と化し人間を圧迫する。存在を主張する。空気としての「実」の性質を捨て「虚」の性質をとろうとする。土は dust から gold を、はたまた別の dust を生み出し、火の中に描く Lizzie の vision は弟の言うように dream, fancies なのがあるいは姉の言うように the real world (p. 288) なのか。人も自然も「実」と「虚」の間を彷徨う。いや自然界が人間界の実相を映し出しているのであろう。

斯くの如く、あらゆるものが物と化しているのだが、Wrayburn はある時 Boffin に蜜蜂に喩えられると ‘I object on principle, as a two-footed creature, to being constantly referred to insects and four-footed creatures.’ (p. 93) と抗議する。同様に遺言により見知らぬ男の許嫁となった Bella はその男の「死後」、財産も地位もない Rokesmith に求愛され、まだ金に執着していた時ではあったがこう抗議する。‘And was it not enough that I should have been willed away, like a horse, or a dog, or a bird;…Am I for ever to be made the property of strangers?’ (p. 377) この小説に於て著しい人格的变化を遂げる二人が同じように動物に喩えられる事あるいは動物のような状態にいる事を嫌悪しているのは面白い一致であり、小説の冒頭で Jesse Hexam が死体を漁る bird of prey と化しているのとは対照的である。二人の中に非人間化、墮落から逃れたいという潜在的願望があるのであるであろうか。

III 生 と 死

『互いの友』では今迄に述べたように土、火、そして、風が重要なイメージとして使われているが、四元素の一つである水のイメージも滔滔と物語の中を流れプロットと有機的に結びつく。

多くの人間が河で死んで行く。老 Harmon と Betty Higden の孫 Johnny を除いて他の人々は溺死するか溺死寸前で救われる。河で死亡するのは John Harmon の身代りの三等航海士、Jesse Hexam, Riderhood, 彼は一度助けられその後 Headstone と共に溺死する。John Harmon 自身も溺死寸前で助か

『互いの友』論

る。Wrayburn は恋人 Lizzie によって助けられる。Higden は河の傍で死ぬ。

John Harmon は三等航海士が自分の服を着て死んだ事で「死者」となり自分は辛うじて河から抜け出し Handford, Rokesmith として姿を現わす。彼は the living-dead man (p. 373) なのである。「実」の彼は死んだ事になり「虚」の彼が河から上って来る。「実」の彼は彼自身の述懐によると「父の富の齎した悲惨以外何も知らず、自分自身そしてあらゆる人間を恐れ心引き裂かれおどおどと戻って来た」(p. 366-367) のであった。しかし、「虚」の彼は打って変わった行動の人である。「虚」の人物となる事で「虚」の性格を得、彼は「実」にとっては不可能な現実を乗り越える事が出来たのである。

さて第一章、第二章で述べたように Wrayburn はあらゆる事に無感覚で目的もない虚ろな存在であったが、Lizzie と出会ってその教育にいささか「エネルギー」を注いでみる。しかし彼女に対する自分の気持も彼女の自分に寄せる愛にも気付かず Lizzie の教育者という「虚」の姿に甘んじている。Wrayburn の前から姿を消した理由を尋ねられ、Lizzie は 'If my mind could put you on equal terms with me, you could not be yourself.' (p. 695) と答える。裏返せば彼は現在の社会的な彼だけでなく精神的な意味に於ける彼自身をも捨てねば Lizzie との愛を結実できないとも言える。今の自分を一旦無に返して又生れ変わる事が必要である。その為には Harmon のように河で「死ぬ」という方法がある。斯くて Wrayburn は河へ転落するという激しい洗礼を受ける事になる。Arnold Kettle は河のユング的解釈に反対し、人間性が全く変らなかつた Riderhood の例を挙げて the restorative power of drowning を否定し Wrayburn が河で溺死寸前になるのは Lizzie に助けられるという設定を与えるためであると述べているが⁽⁵⁾、従来の自分自身でないものとなる為にはやはり河での生れ変わりが必要だと思ふ。河に舟を出した Lizzie はその生れ変わりを助けたとも言える。そして、それは又 Lizzie にとっても現実に立ち戻り、それに立脚するという点で意味のある事であった。

ある立場から一時離れ又元の立場に帰る事で自分の authentic self を見出す事を、J. Hillis Miller は dissociation (withdrawal) and reaffirmation と表現したが⁽⁶⁾、今迄見て来たように「虚」と「実」でその過程を置き換えると、

『互いの友』論

Wrayburn は「虚」の自分を一旦「無」に返して新しく「実」となって生れ変わり、John Harmon は Rokesmith という「虚」の存在となる事で「実」を確立し、Boffin も又守銭奴振りという「虚」を演ずる事で Bella を「実」へ導き延いては自分自身も振りが振りでなくなる前に本来の「実」を取り戻した。

ところで、Wrayburn は河から救い上げられてからもしばらくは生死の境を彷徨っているが、以前 Jenny Wren が自分に語った fancy を聞いたがる。その fancy とは Wren がよく仕事の中に現実にはない花の香りを嗅ぎ鳥の歌声を聞くというものだが、今彼はその fancy を共有しようとする。今迄の自分には分らなかった世界を知ろうとする。Wren の「虚」の世界に入ろうとする。Wren はこの fancy に於ても Cinderella-godmother の fancy に於けるように「実」の世界の欠落を「虚」で埋めているのだが、Wrayburn はそういう「虚」の世界を知ろうとする。そしてその「虚」の世界の主 Wren に自分が探しあぐねていた the right word, Wife という言葉を見出してもらう。河で洗礼を受ける前の Wrayburn が陥っている「虚」の世界と Wren の肯定的な「虚」の世界、Headstone が Riderhood に化ける「虚」の世界と Harmon が Rokesmith になる「虚」の世界、どうやら「虚」には二態あり「虚」を生み出すと共に「実」をも生み出すようである。Veneering 家に群がる人々の人間としての感性が鈍磨し物化しているように現代の機械文明の中で非人間化している我々にとって、昨今の幻想文学怪奇文学の流行は「虚」の世界に入る事で人間としての「実」を取り戻そうとする渴望の表われであろうか。

さて一度溺死寸前になって人々の the spark of life (p. 446) に対する興味からの懸命の看護で生き返った Riderhood は the sweat of an honest man's brow という「虚」の仮面を被っている。彼は娘の期待もむなしく河から蘇ってもやはり「虚」のままであったが、Lizzie との愛という「虚」を追い求めた Headstone に絡み付かれて河に沈む。それは「虚」の夫婦 Lammle 夫妻が「見えない手錠」で結ばれていたのに似ている。河は stretching away to the great ocean, Death (p. 71) 河は生に至る道でもあり、死に至る道でもある。そして「実」も生み出し「虚」をも生み出す。

さて最後に、この小説を通して相似た「死への誘い」がなされるのでそれを

『互いの友』論

挙げておこう。まず第一に ‘Come down and be poisoned, ye unhappy children of men!’ (p. 9) という Veneering 家の召使 Analytical Chemist の食事への誘いである。ここでは食べる事が死ぬ事と同義になる。生イコール死なのである。Veneering 家の客間の椅子に Wrayburn が buried alive しているように、生きる為の行為も死への業となる。

第二は Fledgeby の事務所の屋根の上で Lizzie とピクニックをしている Jenny Wren による呼び掛けである。そこは下界の喧噪に比べて「静かで平安で感謝に満ちているまるで死の世界のようだ」と Wren は言う。そして Fledgeby に ‘Get down to life!’ と言い、彼に従って下へ降りた Riah に向かって ‘Come back and be dead!’ ‘Come up and be dead!’ (p. 281-282) と呼び掛ける。ここでは死ぬ事が本当の意味での生きる事に通ずる。ここでは上昇することが死、下降することが生である。生と死の従来が位置が逆転している。Fledgeby の見る所この屋根の上も下界と同じ騒音・煙の中にあるのだが Wren は静かで平安だと言う。ここも又 Wren の「虚」の世界である。Wren は彼女のこの「虚」の世界に入る事で本当に生きよと勧める。

第三は救貧院の慈善を受ける事を潔しとしない貧しいながらも誇り高い自立心の持主である Betty Higden が死の旅に出てその最後が迫りつつある時に the tender river によってなされる呼び掛けである。‘…come to me! I am the Relieving Officer appointed by eternal ordinance to do my work’ (p. 504-505) 救貧院の慈善という「虚」の救済から逃れた Higden を待っていたのは「死」という救済であった。この救済も生に於ける本当の意味の救済に対しては「虚」であるが永遠に続くものであると思えばこれ程絶対的な救済もない。

第四の呼び掛けは罪からも Riderhood からも逃がれられないと知った Headstone の Riderhood に対する呼び掛けである。‘I am resolved to be (drowned). I’ll hold you living, and I’ll hold you dead. Come down!’ (p. 802) 下降する事が死ぬ事である。ここに至ってようやく生と死がその所を定めたのであろう。Higden も; Riderhood と Headstone も「実」も「虚」も死という絶対的な「実」へ向って流れて行く。

『互いの友』論

註

- (1) Charles Dickens, *Our Mutual Friend*, London : Oxford University Press, 1952, p. 127. 以下括弧内の頁数はこの本からの引用を示す.
- (2) Robert Morse, "Our Mutual Friend," in *The Dickens Critic*, George H. Ford and Lauriat Lane, Jr., ed., Ithaca : Cornell University Press, 1961, p. 207.
- (3) J. Hillis Miller, "Our Mutual Friend," in *The Victorian Novel*, Ian Watt, ed., London : Oxford University Press, 1971, p. 129.
- (4) A.O.J. Cockshut, *The Imagination of Charles Dickens*, London : Methuen, 1961, p. 170.
- (5) Arnold Kettle, "Our Mutual Friend," in *Dickens and the Twentieth Century*, John Gross and Gabriel Pearson ed., London : Routledge and Kegan Paul, 1962, p. 222.
- (6) J. Hillis Miller, *Charles Dickens : the World of His Novels*, Bloomington : Indiana University Press, 1958, p. 325-326.